

真言律宗

小田原山

淨瑠璃寺

この寺は東の薬師仏をまつる三重塔、中央宝池、西の九体阿弥陀堂から成りたうでいる。

寺名は創建時の一本尊、薬師仏の淨土である淨瑠璃世界からつけられた。

薬師仏は東方淨土の教主で、現実の苦悩を救い、目標の西方淨土へ送り出す遣送仏である。

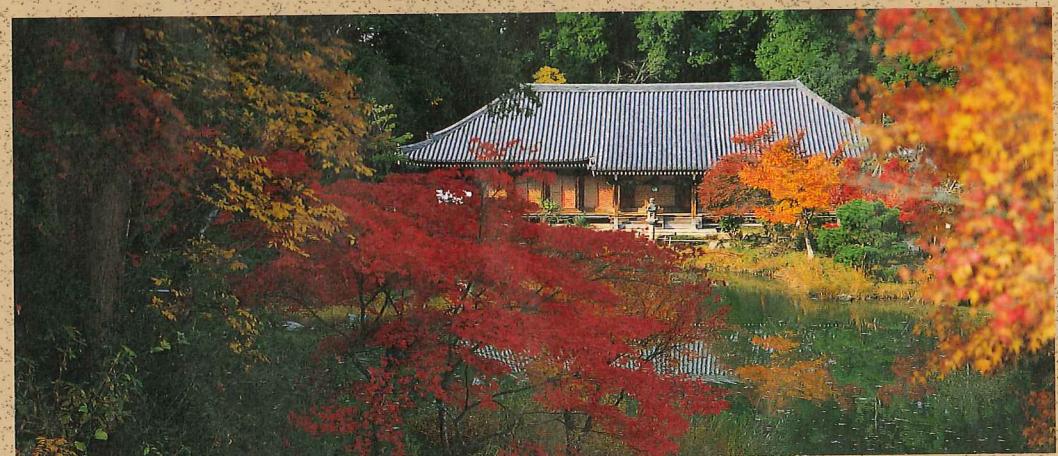
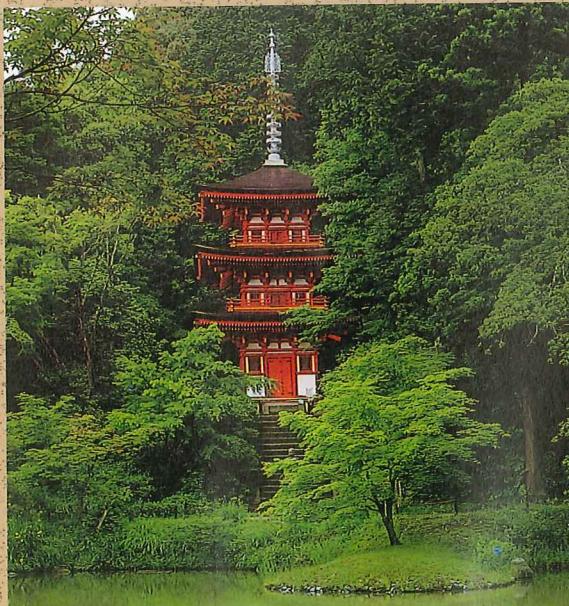
若葉の三重塔
阿弥陀仏は西方未來の理想郷である。

薬師に遣送されて出發し、この現世

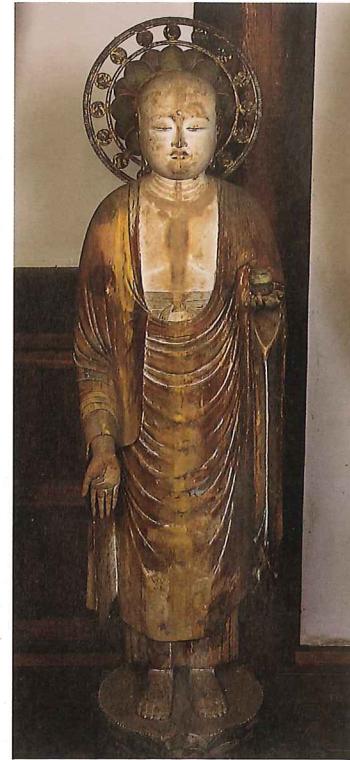
へ出て正しい生き方を教えてくれた釈迦佛の教えに従い、煩惱の河を超えて彼岸にある未来をめざし精進する。

そうすれば、やがて阿弥陀仏に迎えられて西方淨土へ至ることができる。

この寺ではまず東の薬師仏に苦惱の救濟を願い、その前で、ふり返つて池越しに彼岸の阿弥陀仏に来迎を願うのが本来の礼拝である。



紅葉の西方九体阿弥陀堂



子安地蔵菩薩像



阿弥陀如来中尊像



西方九体阿弥陀如来像

●九体阿弥陀如来像（国宝） 藤原時代
 今は唯一のものとなつた九体阿弥陀仏。西の本尊で、未熟な私たちを理想の未来へ迎えてくれる如来。
 “觀無量壽經”にある九品往生、人間の努力や心がけなど、いろいろな条件で下品下生からはじまり、下の中、下の上と最高の上品上生まで九つの往生の段階があるという考え方から、九つの如来をまつた。中尊は丈六像で來迎印（下生印）、他の八体は半丈六像で定印（上生印）を結んでいる。寄木造、漆箔。

●九体阿弥陀堂（国宝） 藤原時代
 当時、京都を中心に競つて建立された九体阿弥陀仏をまつたための横長の堂で、現存する唯一のもの。（正面十一間、側面四間）太陽の沈む西方淨土へ迎えてくれる阿弥陀仏を西に向かつて拝めるよう東向きにし前に淨土の池をおき、その対岸から文字通り彼岸に来迎仏を拝ませる形にしたものである。

一体一体の如来が堂前に板扉を持つ。

●三重塔（国宝） 藤原時代

平安末の治承二年、京都一条大宮から移されてきたもの。初層内は扉の釈迦八相、四隅の十六羅漢図などと、装飾文様で壁面が埋められている。元は仏舎利を納めていただろう。この寺へ来てからは東方本尊の薬師仏を安置している。（十六羅漢図は、重文）

●子安地蔵菩薩像（重文） 藤原時代

現在、中尊の横に立つ子安地蔵と呼ばれる腹巻を卷いた地蔵さま。片手に如意宝珠を持ち、一方は与願の印を示す。木造で胡粉地に彩色された美しい和様像。

●不動明王 珍羯羅童子（重文） 鎌倉時代

元護摩堂（応長元年）の本尊であるこの二尊像は、力強い表情、鋭い衣紋の彫り、玉眼の光、見事な迦楼羅光背など鎌倉時代の特徴をよく顯わした秀像である。

向かつて右にやさしい珍羯羅童子、左に知恵の杖をもつた力強い制多迦童子を從えている。

●四天王像（国宝） 藤原時代

四天王は元来世界の四方を守り、外から惡が入らぬよう、内の善なるものはひろがるようにという力の神。

この寺の像は藤原期四天王の代表像で、特に全身に施された截金を交えた甘美な彩色は素晴らしい。

現在多聞天・広目天が国立博物館に。堂内には持国天と增長天がまつられている。

●淨瑠璃寺庭園（特別名勝及史跡） 藤原時代

池を中心としたこの庭園は、伊豆僧正惠信が久安六年に、伽藍や坊舍の整備、境界を正すなどした時に始まる。阿弥陀堂を東に向かって、その前に苑池を置き、東に薬師仏をまつて淨土式庭園とした。鎌倉はじめの元久二年、小納言法眼がそれを補強する。



〔秘仏と開扉日〕

秘仏・大日如来像

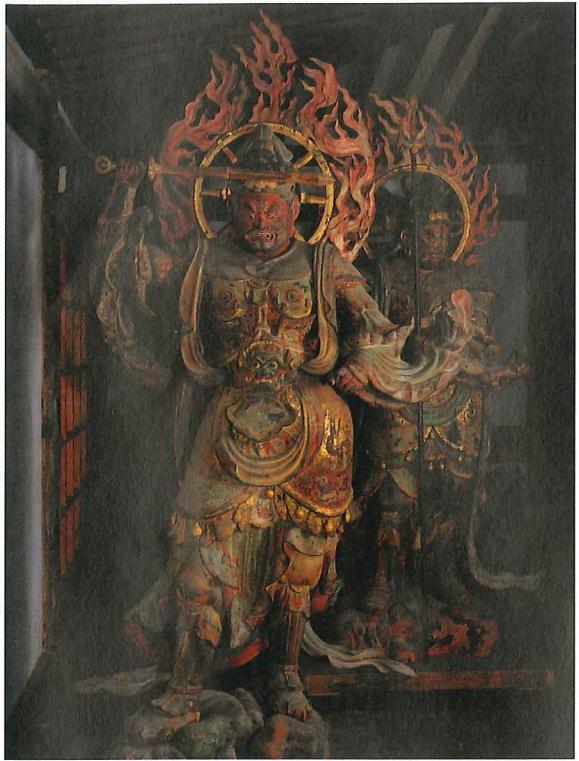
1月8日9日10日の
3日間

秘仏・吉祥天女像

1月1日～1月15日
3月21日～5月20日
10月1日～11月30日

秘仏・薬師如来像

毎月8日・彼岸の中日・正月3ヶ日
(ただし好天に限る)



四天王像一前・持国天、後・增長天一



不動明王三尊像

●淨瑠璃寺流記事（重文）鎌倉時代

淨瑠璃寺の根本史資料文書。

●石燈籠二基（重文）南北朝時代
本堂と三重塔の前、池の両岸にある。阿弥陀仏と薬師仏のお光で、塔の前には貞治五年の年号銘が読める。

●その他 境内には堂前の石鉢（永仁四年）、南無阿彌陀仏の石碑、石橋など。また歩いて十分余りの奥の院には石像の不動明王（永仁四年）などがある。

博物館に出ておられる仏さま

●延命地蔵菩薩像（重文）藤原時代

蓮華座の上に立ち円い頭光を台座からの支柱が支える美しい像である。左手に如意宝珠をささげ、右手与願印で截金を使つた多様な彩色文様もよく伝えられている。端正な姿の木彫りで延命地蔵と呼ばれている。東京国立博物館に出ておられる。

●馬頭観音像（重文）鎌倉時代

怒りの菩薩、たたかう菩薩ともいう馬頭観音の像はわりあい少ない。この寺には仁治二年、南都の巧匠といわれた良賢。増金、觀慶の三仏師がこの地で彫つたことを示す胎内墨書のある四面八臂の見事な木造彩色像が健在するが、今は奈良の国立博物館に出でておられる。火焰光背、蓮座、胎内仏、胎内経巻などもそのまま保存されている。

●他に多聞天——京都国立博物館へ
広目天——東京国立博物館へ

●秘仏・薬師如来像（重文）鎌倉時代

東の本尊、三重塔内に安置されているこの像は九体阿彌陀仏より六十年前に造頭されたこの寺のはじめのご本尊。遠い昔からつみ重ねられてきたいろいろな力を私たちに持たせてこの現実へ送り出し、さらに現実にある四苦八苦をのりこえる力を薬として与えてくれる仏さま。太陽の昇る東について遣送の如来ともいう。

●秘仏・吉祥天女像（重文）鎌倉時代

五穀豊穣、天下泰平。豊かな暮らしと平和を授ける幸福の女神吉祥天。南都の寺々では正月にそういう祈願の法要をするのが伝統で吉祥天の像は多い。この寺の像は建暦二年にこの本堂へまつられたことだけが記録に残されている。(周囲の厨子絵は復元模写されたもの)

●秘仏・弁財天像 鎌倉時代

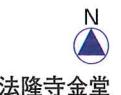
灌頂堂のご本尊、智拳印を結ぶ。詳細は不明。

●秘仏・大日如来像 平安末～鎌倉初期

永仁四年に吉野の天川から勧請されたといわれる像。現在は灌頂堂に安置。



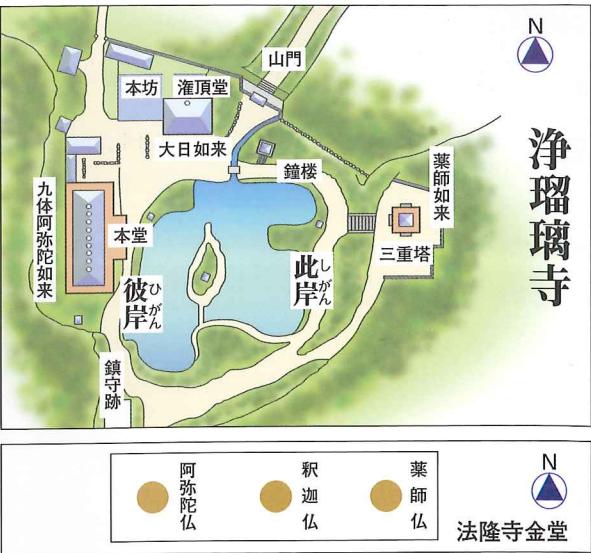
淨瑠璃寺



● 東の薬師、西の阿弥陀
淨瑠璃寺の伽藍配置は、池を中心にして東に薬師如来を祀る三重塔が、西には阿弥陀如來九体を安置する本堂がある。

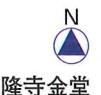
古い寺院の金(本)堂や、都の大極殿などは南面が原則であるが、平安時代の中頃から京都を中心に、阿弥陀如來を東面にまつり、その前に池を造る型が出てくる。平等院鳳凰堂(阿弥陀堂)など、その典型である。奈良の法隆寺金堂では、東に薬師、中央に釈迦(三尊)、西に阿弥陀の三如來が南面に祀られている。

太陽の昇る東方にある浄土(淨瑠璃淨土)の教主が薬師如來、その太陽がすすみ沈んでいく西方浄土(極樂淨土)の教主が阿弥陀如來である。



顯教四方佛

(興福寺五重塔内)
(般若寺石塔など)



法隆寺金堂

● 東の薬師、西の阿弥陀
淨瑠璃寺の伽藍配置は、池を中心にして東に薬師如來を祀る三重塔が、西には阿弥陀如來九体を安置する本堂がある。

古い寺院の金(本)堂や、都の大極殿などは南面が原則であるが、平安時代の中頃から京都を中心に、阿弥陀如來を東面にまつり、その前に池を造る型が出てくる。平等院鳳凰堂(阿弥陀堂)など、その典型である。奈良の法隆寺金堂では、東に薬師、中央に釈迦(三尊)、西に阿弥陀の三如來が南面に祀られている。

太陽の昇る東方にある浄土(淨瑠璃淨土)の教主が薬師如來、その太陽がすすみ沈んでいく西方浄土(極樂淨土)の教主が阿弥陀如來である。

● 過去世・現世・来世

東の如來 “薬師” は過去世から送り出してくれる仏、過去仏という。遠く無限に続いている過去の因縁、無知でめざめぬ暗黒無明の現世に光を当て、さらに苦惱をこえて進むための薬を与えて遺送してくれる仏である。

苦惱の現実から立ちあがり、未来の理想を目指して進む菩薩の道を、かつてこの世へ出現して教えてくれたのが “釈迦” であり、やがて将来出現してくれるのが “弥勒” で、共に現世の生きざまを教えてくれる仏、現在仏という。

西の如來 “阿弥陀” は理想の未来にて、すすんでくる衆生を受け入れ、迎えてくれる来世の仏、未来仏、また来迎の如來という。

● お彼岸

平等院でもこの寺でも、古来、人々は浄土の池の東から彼岸におられる阿弥陀仏に来迎を願つて礼拝した。今も薬師の前から池越しに午後の太陽の軌道をみてみると、春分・秋分「彼岸の中日」には九体仏の中尊、来迎印の阿弥陀仏の後方へ沈んでいくことがわかる。

● 如來(仏)と菩薩

釈迦の教えに従つてすすむ人を菩薩と呼び、その道程を菩薩道といふ。

その道の最終目標を、煩惱の河を渡ると考えて向こう岸、彼岸といふ。彼岸にまで到達し完成した偉大な人格を如來(仏)という。

その礼拝の対象となる如來像は、裝飾もなく大きな徳と次元を超えた知恵を示す二重の頭(肉髻)、彼岸へ到達した象徴の、指の間の膜(曼網相)をもち、普通の眼で届かぬ所を見とおす光を放つ眉間の白毫や、円満な人格の完成をのどの三つの輪であらわすなど、いろいろめでたい相(すがた)を持つてゐる。菩薩は飾りをつけ、肉髻と曼網相を持たない。

● 明王と天

菩薩の道の途中にある障害や悪魔をのりこえ、たたかえるたくましい力と知恵の仏が怒りの “明王” であり、まわりでわれわれの前進をたすけ、まもり、はげましてくれる神々を “天” (多聞天・吉祥天など) という。

● 如來の印相

曼網相のある如來の手にはいろいろな形があり、それぞれいたせつな意味を表わし教えている。中でも三つの基本的な手の形が、“座禅の形”、胸の前あたりに両手首のくる “說法印”、一方は指を上に向け、もう一方は下に向ける “施無畏・与願” といわれる印相である。

図のよう親指と人指し指などをまるくしているのは阿弥陀如來で、その場合、座禅一定印は上生印、說法印は中生印、施無畏・与願を下生印(来迎印)と呼ぶ。上生とは理想を目指し自ら向上すること、高い次元へ昇ることを、下生とはおれたもの、あとになつたもの、弱いものをひきあげ、たする働きをさせることばかりである。中生は說法の印で横にみんなとつながり、たいせつな教えを広げていくことといえる。

淨瑠璃寺の歴史抄（太字）



あしび(あせび)

真言律宗とは

大和西大寺を總本山に大和・山城・伊賀・河内をはじめ、遠くは福島県いわき市、西は四国・九州までひろがっている奈良仏教の宗派。これは鎌倉時代、南都（大和）教学復興の中心についた興正菩薩叡尊（一二〇一～一二九〇）の教え、いわゆる西大寺流を伝えるものである。

| 時代 | 西暦 | 事項 |
|-------|------|------------------------|
| 一〇〇〇代 | 九八五 | 現岩船寺阿弥陀如来像造 往生要集できる |
| 一〇一〇代 | 一〇二一 | この頃源氏物語できる |
| 一〇二〇代 | 一〇二三 | 東小田原隨願寺創建 |
| 一〇三〇代 | 一〇三〇 | 法成寺九体阿弥陀堂供養 |
| 一〇四〇代 | 一〇四七 | 西小田原淨瑠璃寺創建（本尊薬師如來） |
| 一〇五〇代 | 一〇五八 | 末法に入る。平等院鳳凰堂造 |
| 一〇六〇代 | 一一〇七 | 法成寺・大極殿など消失 |
| 一一〇〇代 | 一一一〇 | 淨瑠璃寺九体阿弥陀堂造 |
| 一一一〇代 | 一一二〇 | 中尊寺金色堂造 |
| 一一二〇代 | 一一五〇 | 淨瑠璃寺庭園造・寺觀整備 |
| 一一三〇代 | 一一五七 | 本堂を池西岸に移築 |
| 一一四〇代 | 一一七八 | 淨瑠璃寺三重塔京都より移建 |
| 一一五〇代 | 一一八五 | 平家滅亡 |
| 南北朝 | 一一〇〇 | 解脫上人海住山寺再興 |
| 一一六〇代 | 一一〇七 | 淨瑠璃寺吉祥天像安置 |
| 一一七〇代 | 一一一二 | 海住山寺五重塔造 |
| 一一八〇代 | 一一二四 | （この頃、当尾の磨崖石仏、次々とができる） |
| 一一九〇代 | 一一二九 | 馬頭觀音像造 |
| 一二〇〇代 | 一二九〇 | 西大寺觀音像造 |
| 一二一〇代 | 一二九一 | 淨瑠璃寺不動三尊を迎える |
| 一二二〇代 | 一二五〇 | 并財天像勸請、本堂前石鉢造 |
| 一二三〇代 | 一二五六 | 淨瑠璃寺塔前石灯籠造（以下略） |

淨瑠璃寺拝観のしおり

○午前九時～午後五時

（但し、冬季12・1・2月は
前後各一時間短縮）

●淨瑠璃世界とは澄みきつた
静寂と清淨の世界です

境内では飲食、ラジオ、喫煙など

遠慮して下さい。

本堂内は撮影できません。
携帯電話はマナーモードに。

主な花

現在庭園整備中のため、例年通り
咲かない場合があります
(平成二十八年まで)

春　あしび、さんしゅう
あやめ、かきつばた
あじさい、さきよう
さるすべり、ふよう

夏　あしび、さんしゅう
あじさい、さきよう
さるすべり、ふよう

秋　はぎ、もみじ、当尾柿
冬　千両・万両(実)、水仙

真言律宗

小田原山　淨瑠璃寺

（九体寺）

〒六一九一ー一三五
京都府木津川市加茂町西小

写真／中　淳志

2015.11.30H